

国立ソウル大学 (Seoul National University)

URL: http://www.snue.ac.kr/snue_english/

訪問日時: 2008年3月21日(金) 09:50~12:00

訪問者: 川嶋 太津夫、荻上 紘一、渡辺 達雄、林 篤裕

対応者: Kim Kyung Bum (Assistant Professor, Office of Admissions)

Shin Jung-cheol (Assistant Professor, Department of Education)

Park Hwan Bo (Archivist, Educators Without Borders Secretary)

1) 概要

韓国は比較的短いサイクルで入試改革が実施されており、2002年からは、大学修学能力試験(College Scholastic Ability Test, CSAT と略)と個別試験、内申書(学生簿と呼ばれる)等を総合的に判断して入学者を選抜する制度が始まった。また、近々、より自由度を高めて大学が個々に判断ができるような制度に変更する予定のようである。

韓国の入試制度は 9~12月に実施される「随時募集」(推薦入試に相当)と、12~2月に実施される「定時募集」(一般入試に相当)の、大きく分けて 2つの入り口が用意されている。この間の11月中旬には CSAT が実施される。

韓国の大学進学率は現在のところおよそ 8割であるが、極端な少子化が進んでおり、2019年(11年後)には子供の数が半減すると予想されている。大学全入時代、学力低下、理数科離れ等、日本と同様の現象に直面した国である。このようなことから、地方の大学では既に定員割れを起こしていたり、CSAT の成績を使わずに内申書だけで合格判定を行なっている大学も現われている。今後は「選抜する大学」と「募集する大学」の 2種類に分かれていくであろうとのことであった。

今年の CSAT 成績では、Stanine (Standard Nine の略) と呼ばれる 9段階の等級が通知されたため、国内のトップ大学である国立ソウル大学では、ほとんど識別力を持たなかった。来年からは素点や標準化得点も通知されることになっている。

国立ソウル大学では、1981年に 6530人であった定員を、2005年には 3225名、2007年には 3162名、そして、2009年には 2894名に減らしている。これは、定員減による教育の質の向上を狙ったものであり、逆に大学院は定員を増やしている(4000名台)。

2) 随時募集と定時募集

定員の6割を入学させる随時募集には、「地域均衡選抜」と「特技者選抜」の2つがある。前者は、地域格差を考慮に入れた選抜であり、主に内申書を用いて選抜が行なわれている。また、後者は、文系であれば外国語やIT、理系であれば数学や科学に秀でた学生を入学させることを目的に実施されており、2段階選抜で実施される。まず、内申書や自己評価書、推薦書等の書類選考で2倍までに絞り、その後、文系であれば論述試験(後述)、理系であれば面接で入学者を選考している。

地域均衡選抜の対象地域内には1400程の高校があるが、各高校の第1位の学生が応募してくる選抜となっており、750校の出身者が入学してくる。このことから判るように、特定の高校に集中することなく広範囲のエリアから入学していることが判る。

一方、残りの4割を選抜する定時募集も2段階選抜で実施される。CSATの成績で2倍に絞り、その後、内申書と面接、それに論述試験(後述)で入学者を選考している。

入学者の比率としては、今年(2010年)は定員内で地域均衡選抜(26%)、特技者選抜(32%)、定時募集(41%)を入学させた。これ以外に、定員外の選抜として機会均衡選抜があり、経済的選抜(30名)、農漁村出身者選抜(90名)、障害者選抜(20名)を入学させた。

選抜単位ごとの入学者割合の推移としては、定時募集を66%(2005年)から41%(2009年)に減少させ、代わって、特技者選抜を13%(2005年)から32%(2009年)と増加させ、今後も特技者選抜を増やしていく予定である。これは、入学後の追跡調査の結果、特技者選抜で入学した学生の成績が良いことが挙げられる。国立ソウル大学の場合、定時募集には、CSAT成績の上位0.5%の学生が志願してくる。そのCSATの好成績群から選抜した者よりは、高校時代に特技を持って熱心に勉強した学生の方が思考力に長けており、入学後も伸びるようである。ここには科学高校(理数系高校)の出身者が多く、また、一般高校出身者は、必ずしも成績がトップではないものの、特定の教科の成績が良い者で、大学への適応性も高い。考えられる理由としては、高校時代に内申書やCSATにとらわれずに自由に勉強をしていることが影響しているのではないかとのことであった。

3) 論述試験

韓国で実施されている論述試験は、小論文(日本)や、エッセーテスト(アメリカ)、またバカロレア(フランス)とも異なる独自のもののことである。科目横断型の試験で、

考え方や思考力を試すことに主眼が置かれている。昼休みの 1 時間半を挟んで合計で 5 時間にわたり与えられた問題(文系であれば 3 問、理系であれば 4 問)を解くものようである。今年 1 月の文系の試験では、長文の提示文を読んで、3 問の質問に答える(2500 字程度)ようになっていたようだ。問題の形式自身は事前に公表されているとのことであった。出題と採点は共にソウル大学で行ない、文系用の論述試験の場合、8 名の教員を招聘して作題している。また、採点は 60 名が 4 回のチェック作業を行なっている。2008 年 1 月実施時には約 4000 名が受験したとのことであった。

4) 入学管理本部

入試業務を担当する部署として、入学管理本部を置いている。1998 年以前は入試成績として CSAT の点数をそのまま利用するだけであったので、教務課の職員 1~2 名という小さな組織で入試業務を担当していた。しかし、CSAT の点数だけを用いた選抜で十分なのか、CSAT が高校の教育を反映しているのか、また、CSAT 対策だけに長けた学生が入学してきているのではないかという問題意識から、2000 年に入学管理本部を設立し、事務支援を行なう「入学管理課」と研究・企画を行なう「入試選考室」を配置した。前者には事務系職員が 12 名(常勤)、後者には教授等の専門研究員が 32 名(内 21 人は助手)(常勤 3 名)が所属している。入試選考室の業務は入試制度の研究、書類評価、志願者の面接評価、入学相談、広報等である。非常勤の研究員は大学内に別のポジションがあり、繁忙期にこちらの業務を手伝うことになる。例えば対応いただいた Kim 先生の専門は、中世ルネッサンス文学とのことであった。入試業務はリスクが高いため敬遠されるが、教員評価時には、専門分野の研究以外に入試業務も評価の対象となる。

年間を通じて入試業務があり、現在 17 種類の大学入試(大学院を含めると 20 種類ぐらい)がある。研究大学として、一部教員に入試業務を集中させ、他の教員の面接や論述試験の採点の負荷を減らしたいと考えている。また、事務系職員にも情報化・電算化の分野で入試の専門家を育成していこうとしている。

5) 将来計画

従来、政府の影響力が強く、大学の自立性が認められていなかったが、今後は「大学の自立性」を強くしていく予定である。入試についても全面的に再検討を行なって

おり、高校の教育課程と CSAT が合致していない点、高校間格差に基づいた内申書の評価方法、内申書の信頼性等について議論を行なっている。ただ、CSAT は年に 1 回の実施であり、一方、内申書は高校 3 年間を通した履歴であるので、この両者をどのように使い分け、どちらを重視するかは悩ましい問題である。

韓国として、入試の特性を「多様化」、「特性化」しようと考えており、国立ソウル大学では、「黙っていても良い学生が勝手に志願して来る大学」から、「素材として良い学生を探し出して教育する大学」にするという「教育効果の高さ」に重点を置いた選抜にしてはどうかと考えている。

他には、大学の競争力を高めるための多様化の一例として、アメリカにおける AO 入試に相当する自己推薦入試の導入の可能性を探っている。一方、指定校推薦制度を検討したことはあるが、導入した場合の社会的影響力の大きさから実現は難しいという結論に達したということであった。

また、志願者の出身高校を評価するための多くの資料を大学側から請求することを計画している。「スクールプロフィール」として以下のようなものを可能な限り収集し、合否判定の基礎資料にしようと考えている。現在は、「自信のある高校だけ」が提出に依っているが、今後は志願者の出身高校全部に強制的に提出してもらおうと考えている。この背景には「教育機関の情報公開法」が施行された(2008 年 5 月)ことも追い風になっている。

[スクールプロフィールの例]

- ・ 地域の学校数、産業数
- ・ 教育課程
- ・ CSAT の成績の分布
- ・ 内申書の成績分布
- ・ 過去の大学別の進学履歴
- ・ 校外試験の成績(TOEIC, TOEFL 等)